

やまと 民俗への招待

鹿谷 熟

12日、春日大社で春日赤童子の講演会が行われた。興福寺多川良俊氏、国立博物館清水健氏、奈良市教育委員会岩坂七雄氏と私がそれぞれの立場から見解を述べたが、大変興味深い催しだった。

奈良市東包永町の赤

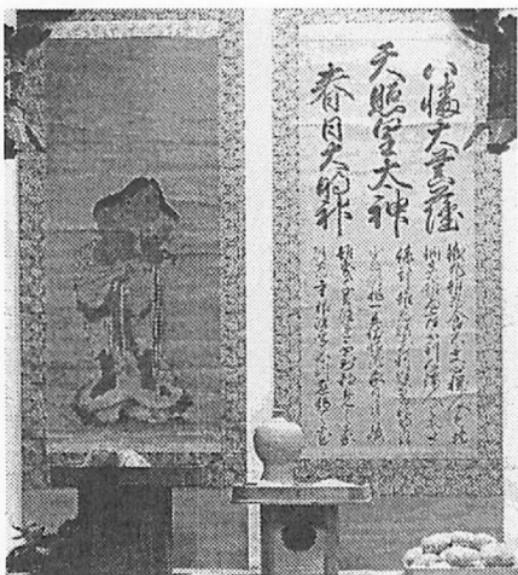
童子祭りは、すでに本欄で紹介したが、私は赤童子祭りの現状を示した上で、「辟邪の色としての赤」、さらに「道徳的なあり方としての赤」について話した。赤童子の一つの特徴が、その面部や体の赤さだが、赤は民俗的には辟邪の色といえる。

る時にも、赤い衣服などが用いられる。貞原益軒の弟子香月啓益の記した子育て指南書『小兒必用養育草』にも、天然痘除けには「屏風衣柄に赤き衣類をかけ、そのちごにも赤き衣類を着せしめ」るべしとある。

悪疫を避ける赤い着物の利用は、江戸後期に天理教を創唱した中山みきにも見られる。急速な信仰の広がりに、明治期には政府の弾圧を受け、度々警察に連行されて取り調べを受けたが、「いつ

も真っ赤な着物を着てはきたので「子供の目にも、また連れて行かれるなや」とこれを自説した。

母の言葉を増尾正子は書き留めている（『奈良町回顧』）。中山みきは1874（明治7）年以来「赤衣」を着用し、その



赤童子祭りの祭壇=筆者提供

清らかな心示す赤

召し下ろしを「証拠守り」として、人々に授けるようになつたといひ。赤衣については、教祖自らが、「このあかいきものをなんとモアリムカニ月日がこもリするそや」（『おもでさき』六号63）と語つてゐる。うに、赤い衣には神が宿つてゐる所だ。これをお守りにすることば、赤色が悪疫除けになると、いう民間信仰をも踏まえたものだらう。

同時に、赤は自らの心に邪心のない清らかな心を示す言葉「赤き心」としても古代から用いられてきた。中山みきが赤衣を常用するようになつたのは、民間信仰における辟邪の色としての赤だけではなく、自らの偽りのない、真心の信仰を対外的に示すものとして用い始めたのかもしない。赤に対するこうした古くからもの意識を背景として、赤童子も誕生したのではなかと思われる。赤童子についての各氏の見解は、おん祭保存会の今年度版『春日若宮おん祭』に詳しい。

（奈良民俗文化研究所代

表）

痘瘡神など悪疫を避け

隔週掲載